

洗礼を受けたユースのために

聖書について About Bible



☆目次

Lesson 1	聖書とは	1
Lesson 2	聖書の流れ	3
Lesson 3	旧約聖書・律法の書	5
Lesson 4	旧約聖書・歴史書	7
Lesson 5	旧約聖書・諸書	9
Lesson 6	旧約聖書・預言書	11
Lesson 7	新約聖書・福音書	13
Lesson 8	新約聖書・使徒の働き	15
Lesson 9	新約聖書・手紙	17
Lesson 10	新約聖書・黙示録	19



Lesson 1 聖書とは



私たちが手にしている聖書は、「世界のベストセラー」と言われています。よく売れてはいますが、実際に「最初から最後まですべて読みました」という人は少ないようです。あなたは聖書とどのように関わっていますか？ 聖書に親しむために、このレッスンでは聖書とはどのようなものかをいっしょに学んでみましょう。



1. 聖書が書かれた歴史

聖書は、旧約聖書、新約聖書という二つの部分からなっています。あの分厚い聖書のおよそ3分の2が旧約聖書、残りの3分の1が新約聖書です。旧約聖書は合計で39巻の書物、新約聖書は27巻の書物に分けられています。聖書はとても長い時間をかけて、たくさんの人たちの手によって書き記されました。旧約聖書は、紀元前1500年頃から、それまで口伝（くでん・人から人へ言い伝えること）として伝えられてきたものが文章としてまとめられていったようです。新約聖書は早くからパウロが書いた手紙が諸教会で読まれていたので、諸教会でそれらの手紙が書き写され、保管されていました。福音書なども同じように書かれ、これがやはり諸教会で書き写されて保管されるようになり、紀元2世紀あたりまでには、現在の新約聖書のほとんどが教会によって受け入れられていました。このように旧約聖書39巻、新約聖書27巻が正典（せいてん）として正式に受け入れられるようになりました。

2. 聖書の目的

これだけの長い時間をかけ、多くの著者によって書かれた聖書ですが、一貫した目的がちゃんとあるのです。それは、私たちが神様の祝福に招き入れられ、幸いな生活を送ることができるようになることです。

聖書が伝えようとしている私たちの幸いとは、私たちがお金持ちになったり、人生で成功したり、人々の間で有名になったりすることではありません。私たちが神様に愛されていることがわかり、私たちの人生に神様が計画してくださることを受けとめていくことです。そのような人生は、なくなることはない平安で満たされ、神様を心から礼拝し、賛美し、感謝することができるのです。

しかし、このような素晴らしい人生をおくるために、どうしても乗り越えなければならない問題があります。それは私たちに罪があって、神様と正しい関係を持つことができないということです。

そのような私たちを救うために、神のひとり子であるイエス様がこの世に遣わされ、十字架にかけられ、そして死からよみがえってくださったのです。この神様の素晴らしい救いの約束は、聖書66巻の全ての書物の中で、いろいろな形で語られています。あなたも、神様の救いの計画がどこに書かれているのだろうかに興味を持って聖書を読んでください。

3. 神のことばと啓示

聖書は神様が私たちに「啓示（けいじ）」された書物です。「啓示」とは、神様がご自分の真理を明らかにして下さることです。神様が永遠の昔より、私たち人間に対してお考えになっておられたことが、聖書を書く人々の手を通して書き表され、それらの文章が集められて聖書となったのです。

テモテへの手紙第二章16節では「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒（いまし）めと矯正（きょうせい）と義の訓練とのために有益です。」と語られています。「靈感」というのは、神様がご自分のお考えを人間の手を通して書き表したということです。

私たちが所属する日本同盟基督教団の信仰告白第1条には、次のように語られています。

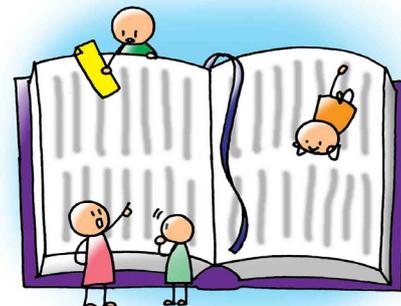
「1. 旧、新約聖書66巻は、すべて神の靈感によって記された誤りのない神のことばであって、救い主イエス・キリストを顕（あら）わし、救いの道を教え、信仰と生活の唯一絶対の規範（きはん）である。」

今も生きておられる本当の神様がお書きになった聖書だからこそ、私たちの救いと生活のための唯一絶対のよりどころとなるのです。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- 創世記 1章（神はことばをもって世界を造られた）
- 詩篇 119篇（みことばの恵み）
- ローマ人への手紙 16:25～27（聖書の目的）
- テモテへの手紙第二 3:16（聖書の目的）
- ヘブル人への手紙 4:12（みことばの役割）
- ペテロの手紙第二 1:20～21（聖書は神のことば）





Lesson 2 聖書の流れ



このレッスンでは、聖書がどのような時代背景の中で記されていたのかをいっしょに考えましょう。聖書の時代に起こったたくさんの出来事と、それに対する神様のご計画を関係づけたチャートを見て、どの書がどの時代のことを記しているか、何について記しているかを簡単に確認しましょう。



キーワードは「契約」

チャートを見てください。真ん中の破線でかこったところが、聖書の主な出来事です。右側がその出来事に対して神様がどのような計画を持っておられるのかを表しています。神様のご計画の中で、ところどころにキーワードが出てきます。それは「契約」(けいやく)という言葉です。

聖書の内容や歴史を考える時、「契約」という言葉はとても大切です。旧約聖書と新約聖書の「約」はその「契約」を表しています。旧約聖書では神様が与えてくださった古い契約のことが語られ、新約聖書では、神様が与えてくださった新しい契約のことが語られています。神様はすべての歴史を通して、古い契約を土台とされて、さらにその契約を更新して新しい契約を与えてくださったのです。

神様の契約とは、神様が人間と直接に交わされたもので、人々が神様の言葉を信じ、その存在を疑わず、神様に従うなら神様からの祝福を与えられるというものです。まずアダム(創世記 3:14~19)に対して与えられ、次にアブラハム(創世記 12:1~3、15:4~5 など)に、そしてモーセ(出エジプト記 19~23 章)、ダビデ(Ⅱサムエル記 7 章)に対して契約が更新されていきました。

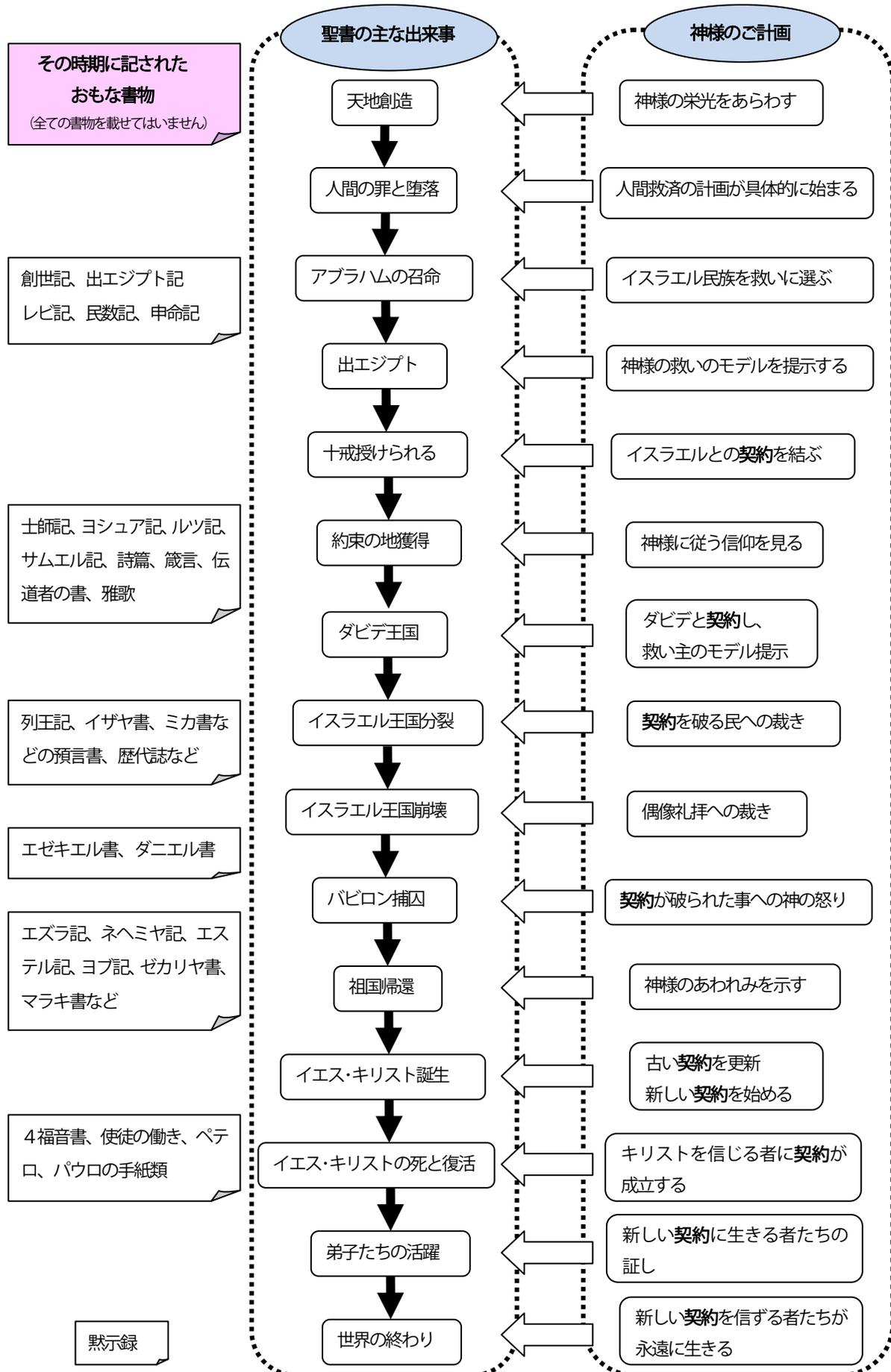
そして、ついにイエス・キリストによる新しい契約が与えられることとなったのです。誰でもイエスを信じることで神様との契約に入れられることができるのです。そして、私たちの罪が赦され、神の子の立場に戻していただき、永遠の命をいただく者となることができるのです。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- 創世記 3:14~19 (アダムとの契約)
- 創世記 12:1~3、15:4~5 (アブラハムとの契約)
- 出エジプト記 19~23 章 (モーセとの契約)
- サムエル記第二 7 章 (ダビデとの契約)
- エレミヤ書 31:31~34 (新しい契約)







Lesson 3 旧約聖書—律法の書



このレッスンでは、旧約聖書の最初の区分である「律法の書」を説明します。書物としては、「創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記」です。この部分では、神様が人間と契約を結び、私たちが神様の戒めを守って生きることの幸いが語られています。



創世記

創世記は、神様による世界の創造から始まり、人間が誕生していく様子(1、2 章)、その人間が罪を犯してしまったこと(3 章)、また神様の言いつけを守らなかったことにより、人間を戒める大洪水が起こされたこと(6～9 章)、人間の話す言葉がバラバラになってしまった理由(11 章)、さらに、神様と契約を結ぶ民となるために選ばれたアブラハムとその子孫たちの生活が描かれています(12 章)。神様の不思議な導きでイサクの子ヤコブの子ヨセフがエジプトで総理大臣となり、最終的には、アブラハムの子孫であるイスラエルの民はエジプトに住むことになりました。

出エジプト記

出エジプト記では、エジプトの奴隷となっていたイスラエルの民を解放するために神がモーセを召し出したこと、そしてさまざまな困難を乗り越えて、出エジプトをなしとげたこと(1～11 章)、そこからモーセに導かれて十戒が与えられたシナイ山までの歩み(12 章以降)が記されています。特に大切なのは、神様と契約を結んだ民が神様を礼拝する民となるために必要な戒めが与えられ(20～23 章、25～31 章など)、それを実行していく人間の姿が描かれています(24 章、35～39 章)。神様はイスラエルの民を全世界の代表として選ばれ、彼らの姿を通して神様に従うことの幸いをお示しになられたのです。

レビ記

「レビ記」は、エジプトから解放され、これからいろいろな民族に囲まれて生活していくイスラエルの民に向けて、「神の民」であり続けるために神様が示した様々な規定が書かれています。いけにえをどのようにささげるか、祭司としての仕事はどのようなものか、神に心を向けるために安息日や祭りをどのように守るか等、かなり具体的な内容です。

民数記

「民数記」はその書名のとおり、民の人数を数える出来事があったことに由来しています。神様の約束してくださった国を目指す旅の途中での人口調査(1～4 章)やイスラエルの民がどのような仕組みでま

とまって生活をしたらよいのか(5～10章)が記されています。また、十戒が与えられたシナイ山から約束の地に至るまでの民の歩みが記されています。そこには、約束の地の手前まで来て、自分たちの考えと経験だけで判断して神様に逆らったために、神様がさらに40年間も荒野をさまよわせたこと、民の神様に対するさまざまな反逆などについても記されています(13～15章)。

申命記

「申命記」の「申命」ということばは、もう一度言う(復習する)という意味があります。40年間、荒野をさまよう中で育った新しい世代のイスラエルの人々のために、人生の最期にモーセがもう一度、神様のお考えを復習するつもりで語ったものです。きびしい荒野の旅も守られ、神様に養ってもらった経験から、イスラエルの新しい世代の民に、どのように神様を礼拝し、どのように従うべきかを語っています。そして新しいイスラエルの指導者としてヨシュアが任命されたことを記録しています。

このように、「律法の本」の部分では天地創造と墮落(だらく)、神様に従う者たちの歴史が重ねられていきます。さまざまな人間の不信仰にもかかわらず、神様の計画は着実に進んでいきました。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- 創世記 1:1～3:24 (天地創造と人間の墮落)
- 創世記 12:1～4、18:1～15、22:1～14 (アブラハム)
- 創世記 28:10～19、32章 (ヤコブ)
- 創世記 45章 (ヨセフ)
- 出エジプト記 1:1～14、2:1～15、
3:1～14 (イスラエルの民とモーセ)
- 出エジプト記 20:1～17 (十戒)
- レビ記 1章 (全焼のいけにえ)
- 民数記 21:1～9 (民の反逆と神の救い)
- 申命記 5:1～21 (十戒を復習)
- 申命記 34章 (モーセの死とヨシュア)





Lesson 4 旧約聖書一歴史書



旧約聖書の第2の区分は、イスラエルの民の歴史を扱っている「歴史書」です。書物としては、ヨシヤ記からエステル記までです。内容的には、約束の地に到着したイスラエルの民がヨシヤの指導のもとで領地を獲得し、やがて王国を築き、その王国が分裂し、敵に滅ぼされ、外国に連れて行かれた後、再び祖国に戻ってくるまでの長い期間にわたる出来事を扱っています。



ヨシヤ記

神様は、イスラエルの人々を神様が約束された地に導くリーダーとして、ヨシヤを選びました。ヨシヤはモーセの忠実な部下であり、また、神様の約束を信じた人でした。彼は、約束の地に人々を導き入れました。そして、そこに住んでいた異教の民を倒してイスラエルの人々が住むべき領地を確保しました。

士師記

「士師記」はヨシヤ記に続く歴史を記しています。約束の地でイスラエルの12部族は領地を確保することに一定程度成功しました。そのうちに、かつて神様が自分たちをどれほど助けてくださったのかを忘れて、偶像礼拝や性的に堕落した生活を始める人々がでてきました。神様はそんな彼らを悔い改めに導き、ご自分に対する信仰を回復させるために試練を与えます。イスラエルの人々はそのたびに、自分たちの過ちを認め、悔い改め、神様に祈り求めます。神様はその祈りにこたえてくださり、イスラエルの人々を解放するためにリーダーをお選びになるのです。彼らのことを「士師」と呼び、オテニエル、デボラ、ギデオン、エフタ、サムソンは士師として有名です。サムエル記に出てくるサムエルは、最後の士師、また、イスラエルの最初の本格的な預言者です。

ルツ記

士師が治めていた時代に起こった、一人の女性の物語が「ルツ記」です。ルツはイスラエル人エリメレクとナオミの間に生まれた息子と結婚しました。ところが、夫と死に別れ、ナオミが祖国に戻る時に一緒についていくことにしたのです。ベツレヘムに着いたルツはボアズという遠い親せきの畑で落穂拾いをしました。ルツの信仰深い生き方と義理の母に対する献身的な姿がボアズの目にとまり、ルツとボアズは結婚をすることになります。二人の間に生まれた子どもの子孫がダビデ王であり、イエス様の歴史につながっていくのです。この書物は、聖書のとても大切な教えである「贖い（あがない）」について語っています。「贖い」とは代価を払って買い戻すことです。

サムエル記、列王記、歴代誌

「サムエル記」にはサウル、ダビデ、ソロモン王によって築かれたイスラエルの統一した王国の物語

が記されています。ソロモン王以降は北と南に王国が分裂し、それぞれの国に神様に従うよい王や神様に逆らう悪い王がいました。「列王記」と「歴代誌」は、ほぼ同時期の出来事を違う視点で書いています。

「列王記」は主に北イスラエル王国の歴史を、「歴代誌」は主に南ユダ王国の歴史を描いています。

いくつかの重要な出来事をあげてみましょう。①神様は民の求めに応じられ、イスラエル史上最初の王としてサウルが選ばれました。②神様は、ご自分の命令にそむいたサウルを退け、ダビデを王として選ばれました。③神様はダビデの子孫を絶やさないという契約を結ばれました。後に、救い主イエス様はダビデの子孫として生まれます。④ダビデの姦淫（かんいん）の罪の出来事は、人間の弱さ・みにくさとともに、心から悔い改める時に赦されることを示しています。⑤ソロモンがダビデの跡を継ぎ、神殿を建設しました。⑥ソロモンの死後、イスラエルは北王国と南王国に分かれました。⑦神様は預言者を通して人々の間違いを繰り返し警告しましたが、人々は悔い改めませんでした。北王国はアッシリヤにより、南王国はバビロンによって滅ぼされ、イスラエルの人々は捕囚として連れて行かれました。

エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記

祖国を離れ、バビロンで細々と生活していた人々は、いつか祖国に帰る日を願っていました。やがて預言者エレミヤの預言の通りに、ペルシャ王によってイスラエルの人々は祖国に戻る許可を与えられました。祖国に戻ってきた者たちは、預言者ハガイ、ゼカリヤなどの励ましによって、ついに神殿を再建することにこぎつけました。人々は祭司エズラの指導によって、聖書の戒めに忠実に生きることを決意しました。このような内容を記しているのが「エズラ記」です。

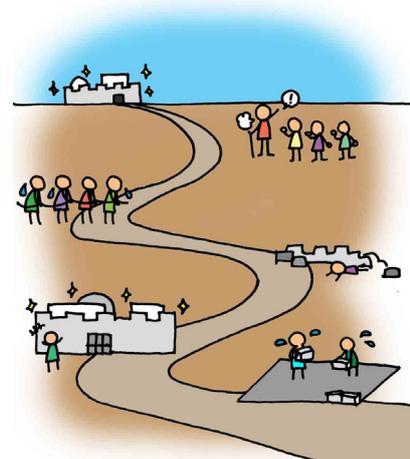
神殿はついに再建されましたが、祖国はまだ廃墟のままでした。その状態を悲しんだネヘミヤがペルシャから帰国してエルサレムの城壁を再建しました。これは「ネヘミヤ記」に記されています。

また、祖国に帰国せず、そのままペルシャに残ったイスラエルの民もいました。ペルシャ王の妃になり、イスラエルを救ったエステルの話が「エステル記」です。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- ヨシュア記 1:1～9（モーセの後継者ヨシュア）
- 士師記 6:7～7:25（士師ギデオン）
- ルツ記 4:1～2（ルツと贖い）
- サムエル記第一 3:1～4:22（預言者サムエル）
- 歴代誌第一 29:1～30（ダビデからソロモンへ）
- 列王記第一 8:1～61（ソロモンの神殿建設）
- 列王記第一 17:1～18:46（預言者エリヤ）
- 列王記第二 24:1～25:30（ユダ王国の滅亡）
- エズラ記 5～6章（神殿の再建）





Lesson 5 旧約聖書一諸書



旧約聖書の第3の部分は「諸書(しよしよ)」あるいは「知恵の書」と呼ばれています。書物名としては、「ヨブ記」、「詩篇」、「箴言」、「伝道者の書」、「雅歌」がそれに当たります。諸書の大半が「詩」の形をとっています。内容は人間の生き方や真理を簡単にまとめた格言のようなもの、神様をほめたたえる賛美の歌、愛情を持つことの素晴らしさなどが書かれています。



ヨブ記

ヨブ記は、ヨブという人が非常に大変な苦難を経験することを記しています。その苦難に対して4人の人たちとヨブとがやり取りしています。人間の経験する苦難の中で、神様への信仰をどのように考えるのかという壮大なテーマが語られています。神様が幸せをもたらしてくれるから神様を信じるのでしょうか、神様が善であるのにどうして苦しみがあるのでしょうか、こういった問題に誰もが直面する時があります。ヨブも同じでした。そんな時、ヨブ記は私たちに力と知恵を与えてくれます。

詩篇

「詩篇」はたくさんのテーマに分かれています。モーセ、ダビデ、ソロモンから、無名の信仰者に至るまで多くの人が書いています。とても長い期間にわたって書かれた神様のことを語る「詩」が集められています。詩篇はエルサレム神殿での礼拝の時に歌われるために作られました。

詩篇には、神様の私たちへのいつくしみや愛の素晴らしさが語られます。また、神様を信頼すること、賛美すること、信仰の喜びが語られています。あるいは、神様に対する心をこめた祈りもあれば、自分の身の上の不満を率直に訴える詩もあります。

新約聖書でもイエス様がしばしば詩篇を引用されています。詩篇の中にイエス様ご自身のことを語る預言もあります。また、個人や共同で神様を礼拝する時に用いる楽器も登場し、当時の音楽事情を知ることができます。音楽好きな人なら、その視点で詩篇を読むこともできます。詩篇はいろいろな読み方ができて興味がつきません。

箴言

「箴言」は人生と信仰のための格言集とも言われます。あるいは、信仰生活をどのように具体的に送るべきかを書いていると考えることもできます。統一したテーマがあるわけではありません。短いことばでテンポよく、信仰者としての生き方を覚えることができるようにしたようです。ソロモン王がおもな著者と考えられています。きっとあなたにも気に入った箴言の言葉が見つかりますよ。

伝道者の書

「伝道者の書」は人生の裏も表も知り尽くしたソロモン王が、神様への単純な信仰を持つことを訴え

ています。「空（くう）の空。伝道者は言う。空の空。すべては空。」と語る1章2節は、多くの人々に人生の意味を考えさせるものです。いきなり「空の空」と言われると、多く人はビックリしてしまうでしょう。でも、この書物を読んでいくと、人は必ず死を迎えなければならないのですが、死ぬことだけをめざして生きているわけでもない、神様こそが人間の生きるための確かな目標であることが語られているのです。あなたも必ず自分の人生を見つめる時があるはずです。そんな時にこの「伝道者の書」はとてすばらしいガイドとなることでしょう。

雅歌

「雅歌」は英語の聖書では「歌の中の歌」(Song of Songs)と呼ばれています。どうしてそう呼ばれているのでしょうか？緑豊かな木陰や花咲く野原で、あるいは牧場、果樹園の中で夫婦あるいは恋人が愛する者に対する自分の純粋な愛を訴えているからです。「雅歌」を読むと、この主人公たちの姿を通して、愛し愛される関係の素晴らしさがよく伝わってきます。その純粋な愛の姿は、最終的には神様と私たちや教会の関係が語られていると理解されています。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- ヨブ記 1章 (ヨブの試練)
- ヨブ記 9章 (ヨブの訴え)
- ヨブ記 38～42章 (神の答えとヨブの応答)
- 詩篇 1篇、23篇
- 詩篇 42篇、73篇
- 詩篇 100篇、121篇、139篇
- 箴言 1:1～9、3:5～12、8:32～36
- 箴言 17:1、17、25:21～28、29:18、30:5～6
- 伝道者の書 1:1～3、3:1～8、4:9～12、12:1～14
- 雅歌 1:2～3、8:6～7





Lesson 6 旧約聖書一預言書



旧約聖書の中の第4の区分は、「預言書」です。たくさんの預言者たちが神様からの言葉を預かって人々に伝えた内容が中心です。イスラエルの国が滅ぼされる前の時代から、滅ぼされて外国に移住させられ、やがて祖国に戻ってくる時代までの、かなり長い時間の中で起きる事を書いています。長さの関係上、この学びでは預言書を一つ一つ説明することは省略します。



1. 預言者たち

預言書には、イスラエルの歴史に登場する預言者たちが書いた預言の言葉が記されています。イザヤ書からマラキ書まで、合計で17の書物、16人の預言者が登場します。イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、ダニエル、ホセア、ヨエル、アモス、オバデヤ、ヨナ、ミカ、ナホム、ハバクク、ゼパニヤ、ハガイ、ゼカリヤ、マラキの預言者たちです。預言者とは、神様から預かった言葉を語る人のことです。神様から人々に対するメッセージ、神様への信仰を失いつつある民を反省させるために神様が民をお叱りになる言葉、励ましの言葉、未来への約束などが書かれています。預言書に登場する預言者以外にも、ナタン、エリヤ、エリシャなど「歴史書」の中で登場する預言者もいます。

2. 預言者の働きとは？

預言者は世襲制（子が親の仕事を継ぐこと）の働きではなく、神様から選ばれた人だけがその働きにつくことができました。彼らの活躍した時代は、古くはダビデの時代から、イスラエルの民がバビロン帝国に捕えられ、その後、祖国に帰ってきた後の時代まで続きます。その間、イスラエルの国は異国に滅ぼされ、異郷の空の下で祖国を思い、困難の中で信仰の再確認をする歴史をたどっていきます。

その時々には預言者は人々の前に現れ、時には王に助言をする立場として働き、神様と人間との正しい関係がどのようなものであるかを思い出させようとしていました。しかし、人々は神様に逆らい、祖国を失うという神様からの裁きを受けることになります。

3. メシヤ預言

特に預言書の中で大切な内容の一つは、イエス様がメシヤ(救い主)であることを預言する「メシヤ預言」というものです。クリスマスに必ずといっていいほど読まれるイザヤ書7章14節は、イエス様がインマヌエル（神様が私たちと一緒にいてくださるという意味）であることを預言しています。イザヤ書53章に描かれている「苦難のしもべ」の姿は、イエス様の十字架の苦しみを預言しています。エゼキエル書47章1～12節は、イエス様がメシヤに従う者には命を与える水となられることについて預言しています。ヨエル書2章28節、3章13～14節ではメシヤ到来の後に聖霊が遣わされることについて預言されています。この預言は使徒の働きのパテコステの時に成就しました。マラキ書4章ではバプテスマのヨハネの誕生についての預言が有名です。ぜひ、実際に聖書を開いて読んでみましょう。預言者たち

が語ったイエス様に関する預言は、イエス様によってすべて成就しました。その事からも、神様が歴史を支配されて、私たちをなんとかして救おうとされた熱い思いが伝わってきます。こうして、預言書は旧約聖書と新約聖書をつなぐ役割を果たしています。

4. 中間時代（旧約から新約までの間）

預言書の中で一番最後に書かれたマラキ書の後、新約の時代が始まるまでのおよそ 400 年を「中間時代」といいます。中間時代の出来事は、聖書の中に記録されていません。ところが、この中間時代に大きな政治的変化が起こります。

中間時代にイスラエル地域はペルシャ帝国からギリシャ帝国、そしてローマ帝国が次々と支配するようになります。新約聖書はローマ帝国の支配の中で誕生していきました。人々が使用する言語も変化し、ヘブル語だけではなく、ヘブル語の親せきのようなアラム語やギリシャ語が使われるようになりました。神様を礼拝する形にも変化が起きました。バビロンに捕われている間に、神殿ではなく会堂で礼拝する形式が誕生しました。後に祖国に戻った人々は神殿を再建しましたが、会堂も建設し、そこで安息日の礼拝を守るようになりました。それが安息日の会堂で起こったさまざまなイエス様の出来事の背景になります。イエス様の弟子たちの働きや、後にパウロが異邦人に伝道している時にもよく会堂が使われました。

ここを讀んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- イザヤ書 1:1～20、6章、7:1～17
- イザヤ書 53章
- エレミヤ書 1:5～8、29:10～14
- エゼキエル書 47:1～12
- ダニエル書 3:16～18、6:1～24
- ホセア書 11:1～4、ヨエル書 2:18～29
アモス書 8:11、オバデヤ書 12～14節
- ヨナ書 1章～4章
- ミカ書 5:2、ナホム書 1:7～15、ハバクク書 2:1～4、
ゼパニヤ書 3:14～17
- ハガイ書 1:2～11、ゼカリヤ書 9:9、マラキ書 3:8～10





Lesson 7 新約聖書一福音書



新約聖書の第1の区分は「福音書」です。「福音書」は「マタイの福音書」、「マルコの福音書」、「ルカの福音書」、「ヨハネの福音書」を含んでいます。救い主イエス様の言葉と行動が記録されています。

なぜ福音書は4つもあるのでしょうか？それは、4人それぞれの視点で記録してある方が、より深くイエス様を理解できるからです。3D（3次元-Dimension-）以上の4G（4つの福音書-Gospel-）で、イエス様が超立体映像化されています。



福音書とは？

「福音」とは、「良い知らせ」（good news）という意味です。「イエス様こそが私たちの救い主です」という良い知らせを書いたものが「福音書」です。「マタイの福音書」、「マルコの福音書」、「ルカの福音書」は、内容が似ている部分が多くあるので、「共観（きょうかん）福音書」と言われています。「ヨハネの福音書」は、少し別の視点からイエス様のメッセージを中心に書いています。

マタイの福音書

「マタイの福音書」は、イエス様の弟子である元「取税人」マタイによって書かれました。この福音書は、ユダヤ人が読んでくれることを意識して書いています。イエス・キリストが旧約聖書の預言者たちによって預言されたメシヤ（救い主—ギリシャ語でキリスト）であることが強調されています。旧約聖書の預言の言葉を引用し、その預言がキリストによって成就した（完全に達成した）ことを強調しています。つまり、長い間人々が待ち望んでいたダビデの子孫として登場するメシヤこそ、このイエス様であることをマタイは伝えています。

マルコの福音書

「マルコの福音書」は、使徒ペテロの弟子ともいえるマルコによって書かれました。マルコは、エルサレム教会の有力な指導者マリヤの息子であったようです。今でいえばクリスチャンホームの2代目という立場だったかもしれませんね。マルコの福音書は、イエス様の生涯をコンパクトにまとめています。超自然的な働きをされるイエス様の姿を力強く簡潔にまとめています。次から次へとイエス様の物語が連続し、読む人にメシヤであることが「なるほど！」と思えるような内容となっています。マルコはおもにローマにいるクリスチャンに向けて書いたようです。

ルカの福音書

「ルカの福音書」はパウロの弟子の一人である医者ルカによって書かれました。ルカは「使徒の働き」も書いた人です。クリスマスの時には必ずといっていいほどルカの福音書が読まれます。1～2章にかけて、イエス・キリストがどのように誕生したかが書かれています。「まことの神なる方」が「まことの

人」として歩まれたことが強調されています。この福音書は、ユダヤ人以外の人々のために書かれているようです。

ヨハネの福音書

「ヨハネの福音書」は、イエス様の弟子であったヨハネによって書かれました。この福音書は、他の3つの福音書とはちがって、出来事の起こった順番にではなく、イエス様が旧約聖書で語られている父なる神様と同じ力、権威を持っていることを示そうとしています。この福音書が書かれた時代は、教会が異端（いたん・間違っただけ）に苦しめられていましたから、イエス様こそがまことの神様であることを確認できるように工夫された内容になっています。

ヨハネの福音書にある3章16節の「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」は、聖書の中心とも言えるみことばです。ぜひ、しっかり暗記しましょう。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- ルカの福音書 1:5～2:52、マタイの福音書 1:18～25、ヨハネの福音書 1:1～5
(キリストの誕生について)
- マタイの福音書 6:5～15 (祈ることについてのキリストの教え)
- マルコの福音書 3:13～19 (十二弟子の任命)
- マタイの福音書 8:5～13 (百人隊長のしもべのいやし)
- マルコの福音書 4:35～41 (嵐をしずめる)
- マタイの福音書 9:35～38 (キリストの宣教)
- ルカの福音書 9:10～17 (五千人の給食)
- ルカの福音書 15:11～32 (ほうとう息子のたとえ)
- ルカの福音書 19:1～10 (ザアカイ)
- ルカの福音書 23:33～53 (キリストの死)
- ヨハネの福音書 20章 (キリストの復活)
- マタイの福音書 28:16～20 (大宣教命令)





Lesson 8 新約聖書一使徒の働き



新約聖書第2の区分は、「使徒の働き」です。「使徒の働き」は、ルカが「ルカの福音書」の続きとして書きました。生まれたばかりの教会が、どのようにしてキリストの福音を伝えていったのか、どのように成長していったかが記録されています。



1. 聖霊降臨と教会誕生 (1～5章)

「ペンテコステ」とよばれる祭りの時に、聖霊が天からくだって来られ、驚くべき奇跡をもって働かれたことが記されています。その事から弟子たちは、聖霊に支配されて、イエスがまことの「メシア（キリスト）」であることを大胆に人々に伝え始めました。その結果としてイエスを主と信じる教会が誕生しました。

2. ステパノ殉教 (6～7章)

教会が誕生し、教会の人数が多くなるにつれてさまざまな問題が生じてきました。そこで使徒たちは教会のいろいろな奉仕を任せるために、7人の執事（しつじ）を選びました。その中の一人であるステパノは、すばらしいクリスチャンでしたが、偽りの証言によって裁判にかけられ、殉教（じゅんきょう）しました。

3. サマリヤ伝道 (8章)

ステパノの殉教をきっかけに、エルサレム教会にいるクリスチャンたちに対する迫害が激しくなり、クリスチャンはいろいろな場所に散っていき、出かけた先で福音を伝えていきました。ピリポという人はサマリヤ地方で福音を伝え、その地方の人たちがクリスチャンになっていきました。またピリポは聖霊の導きで、エチオピアからやってきた高官と出会い、彼に福音を伝えました。このように、迫害によって福音が広がっていったのです。

4. パウロの回心 (9章)

後にパウロと呼ばれるようになるサウロが、クリスチャンを迫害するためにダマスコに行く途中、復活されたイエス様と出会ってクリスチャンになり、異邦人に福音を宣べ伝える使徒に変えられました。彼によって、全世界への福音伝道が現実のものとなっていったのです。

5. 異邦人（いほうじん）に対する働きかけ (10～12章)

10章に登場するコルネリオというローマの百人隊長が、ペテロを通して信仰を持ったことから、異邦人に対する伝道が本格的に始まりました。その後、使徒の働きの主な記録はパウロの伝道の記録となっています。パウロはバルナバの協力によってアンテオケ教会の主要な指導者となりました。

6. 伝道旅行 (13～21 章)

13～14 章ではバルナバとパウロが第 1 回目の伝道旅行に出かけたことが記録されています。途中、ユダヤ人クリスチャンたちと福音の理解の問題を確認するためにエルサレム会議が行われました (15 章)。この会議で、「福音を信じるだけで救われる」という聖書の教えを再確認しました。第 2 回目の伝道旅行では、ヨーロッパにまで福音を伝えることになりました (16～18 章)。さらにパウロは 3 回目の伝道旅行に出かけました (18～21 章)。これらの旅行の途中で、パウロは以前に訪れた教会あてに手紙を送りました。このように、パウロは訪問と手紙によって教会を励ましました。

7. パウロの逮捕と裁判のためのローマ行き (22～28 章)

3 回目の伝道旅行を終えてエルサレムに戻ってきた時、パウロはユダヤ人たちによって捕えられ、裁判にかけられました。しかし、その裁判のなかで、彼は、自分が無実であることを証明するために、ローマ皇帝に裁判を願い出て、ローマに行くことになりました。

こうして、イエス・キリストの命令のとおり(マタイ 28:19、マルコ 16:15)、ユダヤ地方からサマリヤ地方、そしてローマ帝国が支配している地方にまで教会が誕生していきました。クリスチャンが増え、彼らが所属する教会が成長するにつれて問題も出てきました。パウロやペテロは手紙などを通して、それらの教会にさまざまな助言をし、教会は整えられていきました。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- 使徒の働き 1:3～14 (キリストの昇天)
- 使徒の働き 2:1～47 (ペンテコステと教会)
- 使徒の働き 3:1～4:4 (男のいやしと宣教)
- 使徒の働き 6:1～7 (教会のために執事を選ぶ)
- 使徒の働き 7:1～60 (ステパノの殉教)
- 使徒の働き 9:1～19 (サウロの召命)
- 使徒の働き 10:1～48 (異邦人の救い)
- 使徒の働き 13:1～12 (パウロの第一回伝道旅行)
- 使徒の働き 15:1～35 (エルサレム会議)
- 使徒の働き 16:1～40 (パウロの第二回伝道旅行)
- 使徒の働き 18:1～11 (パウロの第三回伝道旅行)
- 使徒の働き 27:1～26 (パウロのローマへの旅)
- 使徒の働き 28:16～31 (パウロのローマでの宣教)





Lesson 9 新約聖書一手紙



新約聖書の第3番目の区分は、「手紙」です。新約聖書には全部で21の手紙があります。これらの手紙は、著者もあて先もさまざまです。この学びでは、「各教会に送られた9通の手紙」、「個人に送られた4通の手紙」、「ユダヤ人クリスチャンに送られた8通の手紙」というように大きく3つに分けてみていきましょう。



1. 各教会に送られた手紙

教会にあてた9通の手紙は、ローマ、コリント、ガラテヤ、エペソ、ピリピ、コロサイ、テサロニケの各教会に送られました。これらの手紙は、みなパウロによって書かれました。それぞれに特徴があります。

「ローマ人への手紙」は、パウロがローマにある教会のクリスチャンにあてて書きました。イエス様を信じることで救われるという福音の中心を確認しています。「コリント人への手紙」は、不道德の問題、聖餐式のあり方、イエス様の再臨の理解についての混乱などについて書いています。「ガラテヤ人への手紙」では、福音と律法の関係について、行いではなく信仰によって救われることを強調しています。

「エペソ人への手紙」では、教会はキリストにある家族であること、クリスチャンがキリストのように生きていくことの大切さを語っています。「ピリピ人への手紙」はキリストにある喜びを強調しています。「コロサイ人への手紙」は、間違った教えについて注意をうながすために書かれました。「テサロニケ人への手紙」は、イエス様が再臨される時はどのようなものであるかを示すために書き送られました。

2. 個人に送られた手紙

パウロは、自分の弟子であるテモテ、テトス、ピレモンにあてて、個人的な手紙を4通書いています。「テモテへの手紙」は、牧師としてどうあるべきかを書いて、テモテを励ましています。「テトスへの手紙」は、教会の責任者としての働きについて書いています。「ピレモンへの手紙」は、ピレモンのもとから逃亡した奴隷のオネシモを、キリストにあって受け入れてほしいと書いた愛に満ちた美しい手紙です。

3. ユダヤ人クリスチャンに送られた手紙

「ヘブル人への手紙」はユダヤ人のために、イエス様こそが救い主、神の大祭司であり、神へのただ一度の犠牲（ぎせい）となった方であることを説明しています。著者はよく分かっていません。「ヤコブの手紙」はイエス様の弟ヤコブが書いたとされています。信仰に基づいた愛の行いの大切さが語られています。「ペテロの手紙」は、ペテロが迫害の中にあつた教会を励まし、キリストの再臨に希望を持つことの大切さを訴えています。「ヨハネの手紙第一」は使徒ヨハネがキリストに従う者たちに、互いに愛し合う生き方を追い求めるように励ました手紙です。「ヨハネの手紙第二」では間違った教えを伝えるにせ教師に対して注意をするようにと語っています。「ヨハネの手紙第三」はヨハネの弟子たちに、ヨハネの

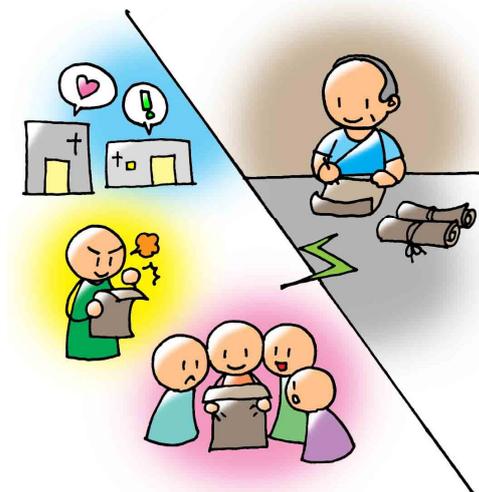
生き方を見習って歩むように勧めた手紙です。「ユダの手紙」は教会に入り込んでいるにせ教師たちに注意するように記された手紙です。

これらの手紙は、キリスト教の教えが確立していくためにとても大きな影響を与えました。そして今も私たちの生き方に大きな励ましと指針を与えてくれます。

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- ローマ人への手紙 5:1～11
- コリント人への手紙第一 12:1～11
- コリント人への手紙第二 4章
- ガラテヤ人への手紙 5:13～24
- エペソ人への手紙 2:1～10
- ピリピ人への手紙 2:6～11
- コロサイ人への手紙 1:9～23
- テサロニケ人への手紙第一 4:13～18
- テサロニケ人への手紙第二 2:1～12
- テモテへの手紙第一 4:6～16
- テモテへの手紙第二 4:1～8
- テトスへの手紙 3:1～8
- ピレモンへの手紙 8～20
- ヘブル人への手紙 11:1～6
- ヤコブの手紙 2:14～26
- ペテロの手紙第一 2:21～25
- ペテロの手紙第二 3:8～13
- ヨハネの手紙第一 4:7～21
- ユダの手紙 3～4





Lesson10 新約聖書—黙示録



ついに、聖書の最後の区分「黙示録」になりました。新約聖書の中の「預言」です。たとえや幻などを用いて文章が書かれているので、分かりにくいところがあります。



1. 黙示録とはどのような書物なのか

黙示録は使徒ヨハネが、迫害を受けていたクリスチャンたちに希望を与えるために、神様からのたくさんのお教をまとめた文章です。紀元90年代後半に、多くの象徴的な表現を使って書きました。

当時のクリスチャンたちは、大変な迫害の中にいました。自分たちは悪魔から攻撃を受けていて、もうだめなのではないかと悲しむ人々もいました。しかしヨハネは、神様は目には見えなくても、この世界を支配しておられ、イエス様によってまもなくクリスチャンたちは勝利を与えられると励ましています。

2. 黙示録をおもしろくする鍵

黙示録は理解するヒントが分かると、とても面白い書物です。

①7つの教会

黙示録2～3章にある7つの教会にあてたメッセージには、どこにも「勝利を得る者」への約束が語られています。この「勝利を得る者」と、どのような「戦い」であるのかは、後に続く幻によって明らかにされていきます。

②「7つの幻」

未来の幻が語られていく場面で注目すべきことは、「7つの封印の巻物の幻」、「7つのラッパの幻」、「7つの鉢の幻」です。これらの幻は実現されていく順になっていないので、ややこしくなります。

③「竜」、「獣」、「にせ預言者」、「大バビロン」

サタンは自分の配下にある「獣」、「にせ預言者」、「大バビロン」を使ってクリスチャンを攻撃します。「獣」は神様を冒瀆（ぼうとく）しながら全世界を支配するようになり、全世界で「獣」や「竜」が礼拝の対象となります。「にせ預言者」は「獣」を礼拝させるために多くの「しるし」をもたらし、人々を惑わしてイエス様から目をそらせる働きをします。

④ハルマゲドン

イエス様が再臨されることによって、地上に巣くう悪魔とその手下たちの働きが滅ぼされる時が来ます。そうならないように、サタンの手下たちが神様と最後の戦いをするのが「ハルマゲドンの戦い」です。もちろん、勝利をするのは神様の側です。

⑤千年王国

ついにイエス様が再臨されます。そして敵が滅ぼされます。サタンは自由が奪われ、千年の間しばられて底知れぬところに追いやられます。その千年間については、いろいろな解釈があります。

⑥サタン滅亡

この千年の間、サタンは神様の厳しい監視の元におかれ、また、過去に殉教した人たちが復活し、その人たちが千年の間統治すると書かれています。その千年間の後にサタンは解き放たれて、もう一度自分の勢力を回復しようとしませんが、ついに火と硫黄の池に落とされて永遠に滅ぼされてしまうのです。

⑦最後の審判

その後に最後の審判が始まります。その時には、「いのちの書」に名を記されていない者たちは、サタンやその手先と共に永遠の裁きを受けます。

⑧新天新地

いのちの書に名を記されている者たちは、新しい天と地に住むことになります。永遠の平和と安全と自由の中で神様と共に過ごす喜びがあります。

3. まとめ

以上が黙示録の簡単な説明です。黙示録には確かにわからないところがたくさんあります。しかし、「むずかしい」、「分からない」とさけてしまわずに、ぜひ最後まで読んでみてください。まことの花婿（はなむこ）であるイエス様のために、私たちが花嫁のように神様に扱われて永遠の都に住む時が必ず訪れます。その時がもう間もなく来ると聖書は語っています。その時が来るまで、あなたにとっては悲しいことやつらいこと、あるいは「どうしてこんなことが起こるのか」と矛盾を感じたりすることがあるかもしれません。しかし、必ずイエス様は再臨してくださって、神様の完全な勝利が実現します。私たちはその時を期待して、その日を待ち望んでいきましょう。マラナタ！（主よ、来たりませ！）

ここを読んでみよう

このレッスンをよく理解することができるように、次の聖書箇所を自分で開いて読んでみましょう。読んだら、□にチェックを入れましょう。

- 黙示録 1:1～8
- 黙示録 3:14～22
- 黙示録 20:1～15
- 黙示録 21:1～8
- 黙示録 22:1～21

